

紀伊大島里域句集

はじめに

里域という言葉がある。これは人間が他人や他の生物、岩石鉱物、空気、水、光、さらには妖怪や魍魎魍魎などと、真心をこめながら造り上げてきた、持続的に共生可能な生態系または時空間のことを意味する。里域に対する言葉は自然域で、これは人類がむやみに干渉してはならない領域である。したがって、地球は人間が関与する里域生態系と人間が関与しない自然生態系に区分できる。

里域は里海、里地、里山、里川、里空などの生態学人類学的部分から構成されている。各部分はお互いに、時に自然生態系と指交しながら連環している。それらは不可分な状態で連続している。前浜で魚介や海藻、塩などの海の幸を、里地でイモやコメ、マメ、野菜などの里の幸を、里山から山菜、木材、獣類、岩石などの山の

幸を分けてもらいながら、そして互いの部分の連環と平衡を見極めながら、里人達は先人からの教えを尊重し、創意工夫し、地域風土に根ざした文化を醸成してきた。

しかし、二〇世紀、私たち人間の思い上がりにより、地球の生態系や文化は急速に、そして徹底的に浸食されていった。森、里、川、海の連環はずたずたに分断され、残余部分も漸次変質していった。里域概念を手がかりに、こうした現状を適切な状態に可及的速やかに回帰させる学術が、私が奉職している京都大学フィールド科学教育研究センターが始祖した森里海連環学である。

さて、地域の文化は莫大な量の部分から構成されているが、そうした文化構成要素の一つが合計一七文字から成る俳句や川柳である。季語という制約に拘らなければ、俳句と川柳は互いに一七文字複合体の関係ともいえる。一七文字複合体にはさらに俳句や川柳以外の未分類なものも含まれる。

しかし、形式はどうあれ、一七文字複合体には森里海連環における心と環境の相互作用の総和が濃縮、刻印されている。言葉を変えて言えば、俳句や川柳などの文学や表現の中に、二一世紀を適切に導く森里海連環学的重要視座が包含されている。森里海の適正な連環方程式が時空を超えて永久保存されているのだ。つまり、里域における古今の俳句や川柳、その他の人間による作品を多面分析することで未来への手がかりが得られるのだ。

さて、紀伊半島の南端、串本町に位置する紀伊大島に仕事上の都合で定住し始めて一〇余年、その間、島民の生活や黒潮、照葉樹林、天の川を眺めながら、一七文字複合体を“approximately 17”（約一七と言う意味）と言うノートに書き記してきた。二〇〇五年の四六回目の誕生日のある日、ふと数えてみると一七文字複合体の合計が三四二句となっていた。チリも積もれば山となる、という諺どおりである。

改めて一七文字複合体記録ノートを読み返してみると、ほとんどが駄作であり、今となっては意味不明な句も少なくなかった。記録当時の異常な心理状況が模写されている場合もしばしば見受けられた。素質が無いのは致し方あるまい。

とはいえ、歴史と文化、生物多様性に満ち溢れる紀伊大島における四季折々の里域生態系の雰囲気や森里海の連環具合が十分に出ている場合も稀にあり、独断と偏見で自己選抜し、やや推敲・改造し、さらに毒性や灰汁の強い句を除去した結果、偶然にもきっかり一〇〇句が生き残った。

この「里域句集」の全一〇〇句は四季別に章立てである。当初、単純に「春」、「夏」、「秋」、「冬」とする予定であったが、黒潮洗う南紀の心地よさ、雰囲気を示す方が適切と考えて、「濃春」、「柔夏」、「緑秋」、「陽冬」という勝手な造語による四季名称で章立てた。一方、義務教育課程ならびに高等教育過程で、俳句や川柳の筆者

以外の人物による推測に基づく解説の虚しさを、日本語力の未熟さも手伝って、しばしば経験してきたので、句集では筆者である私自身の解説を句毎に施した。本人認定による解説であるから間違いは極微量だと思う。句本体と併せてご覧頂きたい。

紀伊大島に直に御越しいただけない方には、既刊の「紀伊大島フィールドガイド―自然編―」をご覧いただければ、難解な私どもの句のご理解に少しはお役に立つと思われる。

なお、巻末には、一つの試みとして季語的単語を含むキーワード索引を付けた。文章が短い、たとえば一七文字句というような表現体はキーワードに満ちていることを改めて実感した。巻末索引が何のために役立つか正直に言って不安なところもあるが、どうか活用していただきたい。

最後に、「里域句集」(A human ecosystem of Kii-oshima Island in approximately 17 letters)を造ろうという衝動を私に与え続けてきた里域景観や里域現象、それらを支えてきた紀伊大島およびその周辺の人々、そして、それらを取り巻く森羅万象や八百万の神々に感謝する次第である。

紀伊大島須江赤崎瀧頭二色にて

二〇〇五年一〇月一日

梅本信也

濃
春

あいの子と 仲良く暮らす

蒲公英ほこうえい

春の紀伊大島では関西タンポポ、東海タンポポ、更に雑種が喧嘩せず
に伸び伸び暮らしている。

兄は草刈りて弟立ち小便

紀伊大島における一農耕風景。

石組みの 灯台沖の 船照らす

檜野埼灯台は日本最古の石組み灯台である。かつて、数え切れない和船にも光明を与えたことであろう。

ウグイスも　ようやく自慢の　声となる

鳴き始めはいまいちであつたウグイスも春が深まると名調子となる。
谷によって微妙に啼き方が違う。

有珠山のように芽ヨモギ 隆起する

春先、ヨモギが勢いよく新芽を伸ばし始める様子が、まるで火山性隆起のようであった。

大玉に 育ったノビルに 目を細め

須江の陽だまり斜面で、太平洋を見つつ老婆がユリ科ノビルの球根の皮をむいていた。特大球根だったようだ。

貝汁のように青い那智の山

シジミ汁のあの独特の青い色と同じ色調を呈した那智山の姿であった。

風吹かば 氷雨吹るらむ ガラス室

超強力台風で破壊された研究用大温室。なかなか修理費用が捻出できず、風が吹くたびにガラスの破片が降りしきる。

雷公なかるみの

白島寝返る 春の海

檜野地区雷光神社から見える白島は、根無し岩と言われている。春の陽気に寝返りしそうである。

キフジ咲く 赤崎小径 春の風

キフジ科キフジの雄個体、雌個体が咲き、小遣い稼ぎとして山取りされる頃、紀伊大島は本格的な春となる。

くろしま
九龍島や

カワウやウミウが

白化粧

紀伊大島の北、古座川河口沖にある九龍島。ウ類の糞で林床は真っ白である。祠の神様はどう思っているだろうか。

金山の 裏橋杭の 美しさ

紀伊大島北西部金山からの橋杭岩の風景は格別である。

クマタカの 木こ練ねり赤実こに 舌こつねづみ

シヨウガ科アオノクマタケランの赤い見は一月頃までに、野鳥が啄ばみ切るが、ときに美味な実が一、二個残っていることがある。

黒鼻の魚附林のカンアオイ

紀伊大島北東部に江戸時代から広がる貴重な魚付林にひっそりと生育するカンアオイ。新種か新変種の可能性もある。

薰風に Vサインを出す 芽ウラジロ

シダ植物ウラジロの芽は春の再来という勝利の美酒を味わっている
ようだ。

黄砂吹く　シイの芽も噴く　苗我島

大陸からの黄砂に塗れながらスタジイは春の活動を開始する。

黄砂舞ふ 熊野の高嶺に 徐福思ふ

黄砂が舞い散る熊野の山々。徐福に今でも便りを届けているようである。

コシダ径　パキリパキリと　藪を漕ぎ

シダ植物コシダの葉柄は硬く、籠などに使われるくらい頑丈である。それを踏みしめて歩く時の音が印象的であった。

桜散る 桜散るなり 希望口

紀伊大島中央部にある希望口バス停付近のオオシマザクラの散り様
は大変に素晴らしい。

里利森 白玉蔓の 畑あり

紀伊大島の魚付林には珍しくも地表を這うアカネ科シラタマカズラの大群落がある。

シイタケに 虐げられる シイホダ木

紀伊大島では年に何度もシイタケが発生するが、さすがに回数を重ねるとホダ木もボロ布のようになる。

シイノキが エビ釣るように 竿を出す

春のスタジイの新芽はあたかもエビを釣っているように見える。

太郎冠者 泥棒メジロの 笑い笑顔

椿の一品種である太郎冠者。メジロがやってきて大変旨そうに花冠横から吸蜜している。受粉とならず椿には迷惑である。

ダンチクの垣根越しの山桜

紀伊半島海岸風景の一要素であるイネ科ダンチク。その垣根の向こうに山桜が咲いている。

竹林の「タケノコ取るな」に ときりとし

筍が盛り上るモウソウ竹林をシメシメと歩いていると、所有者の警告が目に入った。

椿道

ヒメヤブランの 青さかな

紀伊大島西部のツバキ道沿いには、目が覚めるような紺色の丸い果実をつけるユリ科植物ヒメヤブランが生えている。

朴伴や ぼとりぼとりと 落つるかな

独特の構造と色合いの花をつける椿品種、朴伴。その落ち方も独特である。

春アコウ 鈴なる幹果の にぎやかさ

亜熱帯植物クワ科アコウは実を直接茎につける（幹生果）。無数につける姿は実に南国的で、紀伊大島では三回着果する。

春アゼに トウカイタンポポ 咲きにけり

水田の畦に東海タンポポの黄色い花が咲き始めた。植生を含めると
あたかも菜の花である。

春雨に
穂垂れのキブシ
濡れにけり

春先の風物詩であるキブシ科キブシの黄色の花に雨滴が垂れ下がり、
きらりと光っている。美しい。

春一番 駆け抜け ゴンパチ 立ちあがる

春一番が吹いたあと、タデ科イタドリの子節となる。山取りの新茎はだし汁で煮ると美味しい。茹でものは市販されている。

春風に
桜誘れ
小旅行

春のそよ風に乗ってオオシマザクラの花弁がフワリ、フワリと飛んでいく。

春盛り　ハクサンホクが　白い皿

スイカズラ科ハクサンボクの花序は白いお皿を空に向けているようである。空腹時には碗のご飯にも見える。

春先や 時無し百合の花一輪

台湾原産のユリ科タカサゴユリは戦後南紀に侵入、その後拡大を続けていますが、最近年中咲くようになった。謎である。

春雨が 濡らすヨモギの 若葉かな

キク科ヨモギの新葉が雨滴に濡れそぼつ姿は実に美しい。ヨモギ茶もまた格別である。

春の日の 不意の家鳴りに 過時思う

音源不明の低周波振動でまれに窓ガラスが揺れる時がある。まるで地震のような揺れは阪神大震災を思い出す。

不安気に 相語り合う もやい船

時化が近づくと、舟たちは互いに舳い合う。久々の休暇に積もった話を語りあっているようにも見える。

防鳥用の 目玉をつつく 黒カラス

防鳥用装置を嘲るかのような憎らしいカラス類の行動である。しかし、彼らに罪は無い。

水谷の 孟宗竹が 大暴走

紀伊大島西部のある地区ではモウソウ竹林が暴れだしている。里山の管理が十分に出来なくなってきたからだ。

山梅に 群れるメジロの 軽やかさ

梅の木の枝に鈴なりに止まるメジロ。その重量感に勝る春の陽気である。

ヤマビルの 皮をむきては 海を見る

須江の陽だまり斜面で、太平洋を見つつ老婆がユリ科ノビルの球根の皮をむいていた。

夕霧に 浮かぶ金魚葉 ツバキの葉

椿の一品種である金魚葉ツバキ。まるで金魚のような葉群が夕霧の中に浮かんでいる様が幻想的であった。

若アコウ 軒からヒゲを 垂れにけり

クワ科アコウは特有の器官、気根を地面に垂らす。果実が飛び、屋根から根を下ろしている様子は無精髭のようである。

若い子は 多分知らぬと 肩落とす

須江の陽だまり斜面で、太平洋を見つつ老婆がユリ科ノビルの球根の皮を剥きつつ、伝統知識の世代間断絶を嘆いていた。

柔
夏

青芝に　そつと立てり　ネジリラン

真紅のネジバナの孤高な花茎が、野芝に映えて鮮やかだった。

アコウ葉に　チラリチラリと　昼ボタル

亜熱帯植物アコウの葉の上に不時ホタルが明滅を繰り返していた。
ふと、インドネシア国スラウエシ島の保養地を思い出す。

朝蜘蛛が 北半球の 地図を書く

朝、玄関口に緯度経度線付きの地図を髣髴とさせる巢をクモが張っていた。

天の川 海に注いで 漁の火

紀伊大島では天の川が普通に見えるが、目で川を下っていくと星達
がそのまま夜の海の漁火に繋がっていく。

網ミカン　ヒヨドリしばし　思案顔

鳥対策用の中古魚網にヒヨドリもしばし思案顔となる。なお、ミカン食いのヒヨドリは大変美味である。一〇羽は食べられる。

雨あがり 苗族の村々 はるかなり

霧が漂う雨上りの紀伊大島の朝、中国奥地ミャオ族の里域の風景を
思い出した時の句。

嵐来て 臨泊つげる 船長かな

串本湾は避難港である。気の利いた船長は、部下に串本関係者がいると、たいした嵐でなくても臨泊する。

嵐去り 大島港を 飛ぶツバメ

時化が終わり、波静かになった大島港をツバメが真一文字に横切り、はっとした。

オガタマに 香りを添える 沈丁花

モクレン科オガタマノキの果実成熟期（香り無し）に香りを添える沈
丁花の濃い匂い。

カラカラと 楠葉小走る 五月かな

クスノキの落葉が一陣の風とともに地表を軽やかに移動していた。

午後からも 防空ですよと ラツパ鳴り

盛夏。昼からも紀伊大島大森山の航空自衛隊さんは大変にご苦労様である。

ここち良き 青空の後は 嵐かな

晴天。青い空。しばらく続くかも思いきや、紀伊大島でザブリといわれるスコールがやってきた。

残飯を つつくカラスが 思案顔

腐りかけた残飯の風味をハシボソガラスが調べていた。白い飯と黒いカラスの対比が印象的だった。

須江の海 沖行く白帆 青い空

南に傾斜地形の須江地区での眺望は一見に値する。いい感じである。

空高く トンビ飛び交う 檜野埼

一〇二〇〇〇万年前に形成された紫蘇輝石蛇紋岩の岩帯の上で上昇気流に乗るトビが気持ちよさそうだった。

タカノツメのような花身のサンゴシトウ

デイゴとアメリカカイゴの雑種、サンゴシトウの花はまるで唐辛子である。

チシヤノキの 葉中カサつく トカゲかな

マルバチシヤノキの葉は乾くとパリパリに変化する。茶色の葉中からトカゲが飛び出し、意表を突かれた。

天に向け 杯を差し出す ハクサンホク

スイカズラ科ハクサンボクの花序はさながら碗のご飯に見える。

トウオガタマノキ　バナナとバニラの香りなり

何ともいえぬ面妖な香りに時間を過ぎるのを忘れてしまうほどである。

パイロット　ヒヨドリ負けじと　網ミカン

大森山の開拓蜜柑園にたわわになる果実を盗食する鳥に対し、島の半農半漁民は魚網で鳥を撃退する。

飛行機が 青キヤンバスに 白い筆

飛行路直下にある紀伊大島。色々な文字や字体、サイズ、崩し方が
楽しめる。

真夜中の クマタケランに 飛ぶ蛍

アオノクマタケランの葉の表面には特異な光沢があり、そこに映るホタルの光は大変に幻想的であった。

緑

秋

赤崎に 別れを告げる 鉄パイプ

一九九〇年初頭の台風一九号は、ビニルハウスのビニールどころか鉄パイプまでも吹き飛ばした。恐ろしいことである。

畦畔無しの 畦畔を調べて ア然とし

南紀には畦の無い特殊水田地帯、フケ田、があった。最初見たとき
には本当に唾然とした。

魚見台 見つめ見つめる 古座の海

檜野地区にある魚見台。今は使用されてはいないが、江戸時代の様々な出来事がよみがえる。

終バスが 運ぶ檜野の 夕日かな

檜野地区発、串本駅行きの終バスが出る頃、紀伊大島は本格的な夕方を迎える。地魚煮付けの匂いがする。

台風一過　一煮立ちの　秋トンボ

台風が過ぎ去ったあと、大量のトンボたちが何処からか湧いて出てきた。一煮たちした鯉節のようであった。

天高く　メジロ　ヒヨドリ　トラツグミ

鳥獣保護区では鳥たちが思い思いの飛行をする。蝶々もゆつたりと飛んでいる。雉も逃げない。

納屋奥で 出撃を待てり マオランかな

絨維植物マオラン科マオラン。葉は縦に裂くと立派な紐となる。庭
島の納屋の横でひっそりと佇む。

晩秋の
落葉いろどる
サザンカ花片

照葉樹林帯の秋はいま一つ冴えないが、そうした落ち葉にインパクトを与える山茶花の花弁である。

マオランや カヤをまとめて 七〇年

纖維植物マオラン科マオラン。葉は縦に裂くと立派な紐となり、戦中はマオラン工場もあつた。ススキ(かや)を結束するのに利用。

陽

冬

棧橋の 夜もふけゆく 時計酒

串本大橋がなかった頃に活躍した巡航船。二一時の大島行き最終便を気にしながらの居酒屋は大変にスリルがあつた。

それぞれの 言訳運ぶ 最終便

最終巡航船はやや熱気を帯びた船内に多種多様な顔を乗せて運んでいた。

うららかな 今日の家鳴り 加成かな

音源不明の低周波振動のためしばしば窓枠などが揺れることがある。
妖怪級である。冬場、頻繁に繰り返されることが多い。

須江崎の　マオラン独り　海を見ゆ

ニュージールランド原産の繊維植物マオラン科マオラン。戦中は特殊植物であった。今は望郷の中、島で余生を送る。

静謐を破る風の静けさよ

照葉樹林林間は大変に静かである。その静けさを破る風の音もまた静かである。

てらてらと　シイの葉光る　須江の森

海岸林あるいは照葉樹林の葉は独特の光沢を持つ。紀伊大島須江地区の森は冬でも光り輝く。

ぱたぱたと フトン叩きの 昼下り

自衛隊官舎から遙か谷間を越えて、そして森を抜けて生活の音がこ
だましてくる。

椿園に 無碍に捨てたる ファイルム箱

京大実験所にはツバキ約六〇品種が保存されているが、最低限のマナーは守ってもらいたいものである。

群れメジロ ヒシバデイゴの 皮をはぐ

メジロが群れでやってきて、デイゴとアメリカカデイゴの雑種、ヒシバデイゴの皮を剥いでいた。食糧確保か。

ツワの花 今日も雨かと ため息し

キク科ツワブキは虫媒花である。雨が上がり虫たちが来るのが待ち遠しい。

一〇〇円の 店をにぎわす 産直菜

勤勉で元気な島人は自家菜園で得た余剰物を無人販売店に置く。鮮度がいいのは言うまでも無い。無人だが顔も浮かぶ。

ツワブキの 梯子花する ヒラタアブ

キク科ツワブキの他家受粉を達成する昆虫の一つがスカシバ、そしてこのヒラタアブである。

冬空に 不気味に咲いた 早生ハクサン

阪神大震災の約一〇日前、不気味にも真冬の空にハクサンボクが咲いた。前兆とは気がつかなかった。悔しい。

ヒコーキが 来れば鳴き合おう 冬ガエル

真冬でも飛行機が上空を通過すると、カエルたちが一斉に鳴き始める。不思議である。

黒潮と 樹海に座する 初日の出

樹冠から見える太平洋海面から出でる初太陽。宇宙も正常、実に暖かそうである。

ホケキヨーに重なる起床ラツパかな

朝一番のウグイスの囀り。少し遅れて自衛隊の起床ラツパ。まずは鳥の勝ちである。

いつからか 樹冠を眺める 巨石かな

標高六〇mを越える紀伊大島林床には時々巨石がある。津波石であろうか。だとすれば超巨大津波の痕跡となるが。

孟竹が 杉と勝負の 浅間山

紀伊大島でも孟宗竹があちこちで管理不足のため暴走している。管理不足のすぎと競争している姿はじつに哀れである。

誰が先　イチゴ（カシワ）葉取らん　歯抜け藪

押し寿司に欠かせないバラ科ホウロクイチゴ葉。季節になると、良
い葉から採集されていく。その結果、藪が歯抜けとなる。

押し寿司の 具材に込める 心かな

料理の基本はなんと云っても真心である。

紫のカシワ葉命拾いする

押し寿司に欠かせないホウロクイチゴ葉。色の悪い葉は命拾いすることとなる。

暮吹雪　　カラスざわめく　　苗我島

紀伊大島でも時に雪が舞う。ざわめくカラス類と舞い散る雪の対比が印象的だった。

赤崎の 樹海も白く 雪化粧

時ならぬ大雪。紀伊大島暖地森林のシユールな風景である。

高砂や 四季咲ユリに なりにけり

ユリ科タカサゴユリの四季咲き現象。突然変異か温暖化か。

冬空に　ヒシバデイゴの　枝が伸び

デイゴとアメリカデイゴの雑種、サンゴシトウ。別名ヒシバデイゴ。
冬には枯れた花茎が空にやや真っ直ぐに伸びる。

索引

網	天の川	畦畔	アゼ	浅間山	アコウ	秋トンボ	赤崎	青空	青キャンパス	青い空	【あ】 あいの子								
49	48	68	29	94	46	71	99	56	65	58	1								
有珠山	ウグイス	魚見台	【う】		命拾い	イチゴ(カシワ)	石組み	家鳴り	言訳	【い】	嵐	雨あがり	雨						
5	4	69			97	95	3	79	78		51	52	86	50					
	押し寿司	オガタマ	大島港	【お】		エビ	枝	【え】		ウラジロ	梅	ウミウ	海	白島					
	96	53	52			22	101			15	40	11	41	9					
幹果	カンアオイ	カワウ	皮	ガラス室	カラス	カヤ	肩	風	カシワ葉	樫野崎	樫野	垣根	貝汁	【か】					
28	14	11	41	8	57	75	44	8	97	59	70	24	7						
楠	草刈り	具材	【く】		金山	金魚葉	魚附林	巨石	希望口	キブシ	キフジ	北半球	起床ラッパ	【き】					
54	2	96			12	42	14	93	19	30	10	47	92						

クマタカ	クマタケラン	熊野	蜘蛛	黒潮	九龍島	黒鼻	薫風	【こ】	黄砂	声	心	古座の海	コシダ
13	66	17	47	91	11	14	15		16	4	96	69	18

木練り	ゴンパチ	【さ】	最終便	竿	桜	サザンカ	五月	里利	皿	サンゴシトウ	産直菜	栈橋	残飯
13	31		78	22	19	74	54	20	33	60	87	77	57

白い筆	白化粧	沈丁花	【す】	須江	須江崎	須江の森	杉	【せ】	静謐	【た】	台風	白帆	白玉蔓	徐福	小旅行	出撃	樹冠	樹海	終バス	芝	四季咲	シイノキ	シイタケ	シイ	思案顔
65	11	53		58	80	82	94		81		71	58	20	17	32	73	93	99	70	45	100	22	21	16	49

高砂	タカノツメ	タケノコ	立ち小便	ため息	太郎冠者	ダンチク	【ち】	竹林	チシャノキ	地図	【つ】	ツバキ	白帆	白玉蔓	徐福	小旅行	出撃	樹冠	樹海	終バス	芝	四季咲	シイノキ	シイタケ	シイ	思案顔
100	60	25	2	85	23	24		25	61	47		42	58	20	17	32	73	93	99	70	45	100	22	21	16	49

高砂	タカノツメ	タケノコ	立ち小便	ため息	太郎冠者	ダンチク	【ち】	竹林	チシャノキ	地図	【つ】	ツバキ	白帆	白玉蔓	徐福	小旅行	出撃	樹冠	樹海	終バス	芝	四季咲	シイノキ	シイタケ	シイ	思案顔
100	60	25	2	85	23	24		25	61	47		42	58	20	17	32	73	93	99	70	45	100	22	21	16	49

椿園	椿道	ツバメ	ツワ	ツワブキ	【て】	鉄パイプ	天	【と】	トウオガタマノキ	灯台	トカゲ	時無し	
84	26	52	86	88	67	62		63	3	61	34		
時計酒	トラツグミ	トンビ	【な】	苗族	那智の山	納屋	雷公	【ね】	ネジリラン	【の】	軒		
77	72	59	50	7	7	9	73	45		43			
ノビル	【は】	杯	パイロット	ハクサン	ハクサンホク	橋杭	梯子花	畑	初日の出	バナナ	バナラ	歯抜け藪	春一番
6		62	64	89	33	12	88	20	91	63	63	95	31
春風	春盛り	春先	春雨	春の海	春の風	春の日	晩秋	【ひ】	ヒゲ	飛行機	ヒコーキ	氷雨	ヒシバデイゴ
32	33	34	30	9	10	36	74	43		65	90	8	85
一煮立ち	ヒメヤブラン	一〇〇円	ヒヨドリ	ヒラタアブ	昼下り	昼ボタル	【ふ】	Vサイン	フィルム箱	フトン叩き	船	吹雪	冬ガエル
71	26	87	49	88	83	46	15	84	83	3	3	98	90

真夜中	マオラン	【ま】	穂垂れ	蛭	ホダ木	蒲公英	ホケキョー	朴伴	防鳥	防空	【ほ】	冬空	
66	73 75 80		30	66	21	1	92	27	38	55		89 101	
もやい船	孟竹	孟宗竹	【も】	メジロ	【め】		紫	【む】		苗我島	水谷	ミカン	【み】
37	94	39		23 40 72 85			97			16 98	39	49 64	
ヨモギ	【よ】		ユリ	百合	雪化粧	夕日	夕霧	【ゆ】		ヤマビル	山桜	藪	【や】
5 35			100	34	99	70	42			41	24	18	
				若葉	【わ】		臨泊	漁の火	【り】		ラッパ	落葉	【ら】
				35			51	48			55	74	

著者略歴

梅本信也

一九五九年、和歌山市生まれ

京都大学農学部卒業、

同大学大学院農学研究科博士課程終了

京都大学農学博士

黒潮文化研究会 代表

現在、

京都大学フィールド科学教育研究センター

里域生態系部門 紀伊大島実験所

所長・助教授

和歌山県東牟婁郡串本町紀伊大島在住

主な著書

ヒエの博物学

雑草の自然史

紀伊大島きのこガイド

照葉樹林文化論の現代的展開

雑草科学実験法

ヒエという植物

紀州里域植物方言集

資源生物学概論

紀伊大島フィールド・ガイド―自然編―

雑穀の自然史―その起源と文化を求めて―

紀伊大島里域句集

発行 二〇〇五年十一月

著者 梅本信也

〒六四九一三六三二

和歌山県東牟婁郡串本町須江

電話 〇七三五一六五一〇一二五

印刷 ユニバース印刷

〒六一七〇八四三

京都府長岡京市友岡二一〇一二

電話 〇七五一九五三一四三三五